

山と博物館

第55巻 第10号 2010年10月25日

市立大町山岳博物館



朝の微笑み(爺ヶ岳) 齋藤健志

写真展によせて

山岳写真同人四季 代表

宮崎 典代

山岳写真同人四季は、1968年4月に山岳写真を愛する仲間で作られたグループです。首都圏を中心に現在約120名の会員が、日本の美しい山岳風景を中心に、撮影活動を続けています。

山は雄大で美しく、また時に荒々しく、豊かな表情を見せてくれます。私たちはそこへ行ったらこそ出会う貴重な経験や感動、大自然の営みを写真に表現する喜びを感じています。また、大自然のすばらしさに接するたびに掛けがえない大切さを感じます。

創立当初はモノクロームの時代でした。撮影からフィルム現像、プリントなど、暗室作業は大変ですが、だからこそ面白さや喜びがあり、今も多くの会員が熱心にモノクロームフィルム写真を撮り続けています。

今日ではカラーもデジタルの時代を迎えています。ですが、質感にこだわり、大判カメラで撮影する会員がほとんどのため、デジタルへの取り組みは始まったばかりです。

今回の写真展は、「カラー作品」「モノクローム作品」「山の花」の三コーナーで構成しました。

カラー作品、モノクローム作品では「美しい日本の山」を表現しました。「山の花」では、山城ごとに、小さな写真でたくさん山の花を紹介しています。山でよく見かける花や、ちよつと珍しい花もきつとあるはず。ぜひ、探してみてください。

「山と写真」に魅せられて

山岳写真同人四季

宮崎 典代

私は、二十年ほど前、仲間と登った撮影山行で感動的な光景に出会った。冬將軍が新雪を降らせた翌朝だった。広い稜線のあちこちに深いシユカブラが刻まれ、強風に雪煙が舞っていた。

陽が昇り朝日がさし始めると、雪面に美しい薄紫色の文様が現れた。雲海に浮かぶ山々は、雪化粧し朝日に染まり荘厳なまでに輝いていた。太陽の動きにつれ雪面の紋様は、その形と色を変え、雪煙は青空に舞上がったかと思うと雪面を這うように次々と谷底へ飛ばされていた。雪面はピンクからオレンジ、金色へと微妙なグラデーションで変化しやがて



夕照の刻（縦沢岳）名取 洋



朝光の雪稜（奥穂高岳）林 朋房



ガス湧く大キレット（北穂高岳）井川 修

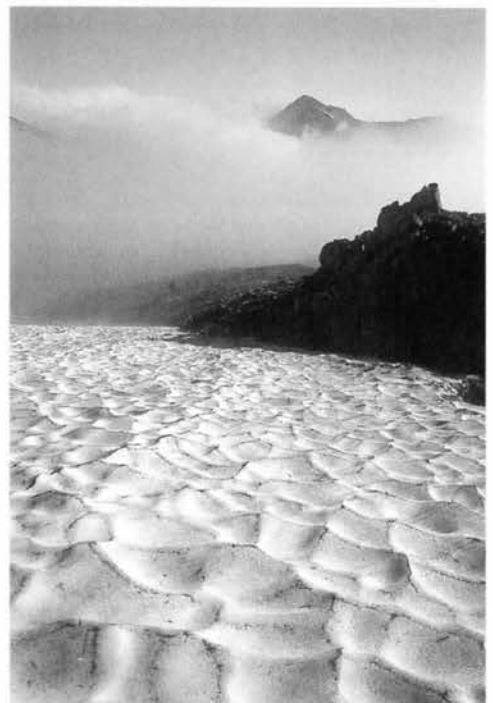
雪の色に戻っていった。寒くても強風で、三脚を立てるのも大変だったけれど、私は初めて目にする雪山で繰り広げられた朝のドラマに心を奪われた。

以後私は、ますます山が好きになり、新雪に刻まれた美しいシユカブラを撮り続けることになった。「山岳写真を表現する」というおもしろさに気づいたのであった。

写真は目の前に広がる風景の一部分をカメラで切り取る作業だが、「写っていない部分を表現するのも写真だよ」と先輩に教えられた。

写真は「真を写す」と書く。

ドラマチックに表現したいなら、露光は少なめ。シャッタースピードを早くして、雪煙を止めて撮る。逆に遅くして煙のように撮るのもおもしろい。足元の雪面を撮るなら形のよい場所を見つけて思いきり近づき、後ろにある山も意識してフレーミングする。太陽にレンズを向けて撮影する時は、ゴーストに注意。ファインダーを覗いて、レンズの前に手をかざすとくつきりするようならゴーストがあるので入らない工夫が必要だ。雲はすぐに姿をかえてしまうので撮影は手早く。きれいな花や珍しい花を見つけたら必ずシャッター



スプーンカットの彼方に（双六岳）松原 貴代司



霧晴れゆく（美ヶ原）井上 のぞみ

を押す。季節感を表現したい。雪解け、芽吹き、梅雨、涼風、寂秋など、あげれば尽きることのない雄大で多様な大自然の「真」を撮ろうと、仲間と共に「山と写真」を楽しんでいる。

「山の花」の撮影

山岳写真同人四季

林 朋房

デジタルカメラの普及によって「花」の撮影方法も多種多様、個々の考えで楽しい写真ができる。今、自然保護や環境問題が問われ、登山道を一步でも外れると周りの齶壁を買うことになる。その中で可憐に咲く「高山植物」の撮影は神経を使う。

山里では立春を過ぎると落ち葉の林床にフクジュソウやセツブンソウ、陽だまりにはスミレ等が次々と姿を見せる。また雪の多い地域ではカタクリ、シヨウジョウバカマ等が雪解けを待つて可憐な姿で順次咲いていく。しかし高山帯の植物は6月から8月の短い期間に、いっせいに競って咲く。花写真を撮りまくって、少しづつ花の名前を覚えるとより楽しさが増す。「山の花」の撮影方法は様々あ



茜色さす (立山別山) 宮崎 典代



森の番人 (奥日光) 常盤 秀樹

るが、
(1) 植生を判るように写す
可愛い花を見ると思わずカメラを向けてパチ！次に美しく写そうと思えばチ！

また、家で花の名前を調べるのに苦労する場合があるので、私は次に周りの環境を入れて撮り、花・葉・茎等時間があれば特徴と思われるものをパチパチ！と写すことにしている。いつも同じ順番で撮るようにすれば判りやすくて忘れない。



雪渓に行く (白馬大雪渓) 古世子 栄一

(2) クローズアップを主体に写す
花の写真は、花を美しく、しかもその花の特徴を写すことも求められる。クローズアップにこだわる必要はない。第一に美しい花を探すこと。周りを見て傷んでなく、花付きの良いもの、光の条件の良いところに咲いているものを探す。光が当たっていても強すぎるとむらが出るので、日蔭のほうが良い場合や曇りや雨でもよい場合もある。第二に、これが最も大切なことだが、背景をいかに上手に設定するか。主題の花を生かすには、背景をボカす。「絞」優先で撮ると操作しやすい。私の場合はクローズアップでも勿論撮るが、風景を焦点距離18ミリ〜55ミリのズームレンズで撮っているので、そのレ



幻想 (八ヶ岳・赤岳) 長澤 義茂

ンズを使い、絞りf8とf5.6で、花にできるだけ近づき、背景に同じ花をボカして入れるようにする。要は周りの条件に気配りができた時はよい写真になる。また時には望遠レンズを使用することもある。
(3) 花を主体に、群落や花と山などを写す
「山の花」で群落の写真はなかなかいい写真が撮れない。それは花の時期や、花の当たり年、気象条件など、運も左右するからだ。それだけに条件に恵まれた時には、自分の全能力を発揮して撮影したいものだ。ふだんから写真技術を磨いておくことが大切だ。花を主題にした山の写真は被写体の花が近くに咲いていると有利だ。広角レンズを屈指して撮影する。

モノクロームは写真の原点

山岳写真同人四季

大石 高志

モノクローム写真は色彩を一切省いた明暗陰影だけで描く映像表現である。色彩の情報があったくない世界は現実にはありえない。ある意味では虚構の映像から作品の狙いや意図を伝えなければならぬ。鑑賞者の体験や感性をよりどころに、墨一色で描いたものからどれだけの感動を感じ取ってもらえるか。そこに大いなる楽しみがある。

山岳写真は、自然の中でもとりわけ標高の高い場所の景観で、普段の生活圏では見ることのできない、いわば山の非日常の世界である。秋空をキャンバスに幾何学模様を描く雲、烈風の雪稜、樹氷や霧氷の幻影、荘厳な日の



静謐 (照葉峡) 境沢 孝弘

出や落日など黒と白の表現が生きる被写体である。それは地球創造の歴史さえ想像させる。美しさを競うカラーフィルムでは表現できない心象の風景である。モノクローム写真の特徴を生かした表現として、撮影者の個性を生かした表現方法を作り出すのが重要である。モノクローム写真としての表現方法の例を紹介する。

【夏雲の表現】

真夏の山岳風景には、雄大に湧き上がる雲、山稜を流れていくガス、また樹林に漂う霧などがある。これらを表現するには、モノクロームの特徴である陰影で表現するのが良い。よりダイナミック、また情緒的な映像を作り出すことができる。

【雪山の表現】

雪山の山稜は、夏とまったく違った姿となる。樹木は雪に覆われ、山稜は真っ白な姿に



輝きの雪面 (宝剣岳) 大石 高志

変身する。太陽の光を反射して輝いているので、晴天の青空と対比して描くと高貴な姿になる。雪稜の撮影は朝夕の太陽光が雪の白い山肌の陰影が際立ち、立体感が表現できる。稜線では、強風による雪庇が雪山の独特な味わいとなる。山頂からの山稜を捉え、山の雄大さを表現しよう。また山稜を部分的に切り取り、斜光線による山肌の陰影を造形的に描いてもいい。山稜に強風が吹いている場合は、雪煙が舞い上がり、山の自然の厳しさを表現できる。

【雪の造形表現】

冬の雪面は風の力によりいろいろなパターン、の模様が見れる。シユカプラと呼ばれる風によるひだ状の縞模様が代表的な景観である。この模様は、風の流れる方向や雪面に当る光の陰影を工夫して撮影すると、雪山の抽象表現になる。



風のメロディー (立山別山) 三間 千恵

山岳写真同人四季の活動

創設：昭和43年(1968年)
会員数：首都圏中心に120名
写真展：カラーとモノクロ写真を国内で35回、
韓国での海外写真展4回。
1989年 大町山岳博物館で写真展を開催。
その他、「花の写真展」や「共作展」「巡回展」などを開催。
出版物：モノクローム
『ハッ坊』 1978年 自費出版
『我が心に燃える山』 2000年 東京新聞出版局
『日本の山 百景』 2004年 東京新聞出版局
『藍色 日本の山』 2006年 東京新聞出版局
カラー
『四季 日光』 1988年 グラフィック社
『日本アルプスの四季』 1984年 東京新聞出版局
『讃歌四季』 1988年 クレオ
『山の四季』 2002年 東京新聞出版局
『四季讃歌』 2007年 東京新聞出版局
CD-R写真集
『山の四季』『北アルプス』1986年 日経BP社
『山の花』 1997年 日経BP社
『カイドバック』
『嵐山 嵐山ハイキング』 2002年 実業の日本社



シダ輝く (御岳・油木美林) 安田 郁子

山と博物館 第55巻 第10号
発行 2010年10月25日発行
〒398-0002 長野県大町市大町八〇五六、一
市立大町山岳博物館
TEL 〇二六-二二二-〇二二二
FAX 〇二六-二二二-二二二二
E-mail: shanphoto@yamanote-museum.jp
URL: http://www.yamanote-museum.jp/shanphoto
印刷 大糸タイムス株式会社
定価 年額 一、五〇〇円 (送料含む) (切手不可)
郵便振替口座番号 〇〇五四〇一七、一三二九三



この「山と博物館」は再生紙を使用し、石油溶剤の代わりに大豆油を使用した大豆インキで印刷しています。